日印国交樹立60周年に於いて、英国人「ニューヨーク・タイムズ」記者ヘンリー・Hストークス・氏が基調演説を行った際の、簡潔に当時の日本の立場を理解しやすい内容だったので、お叱りを覚悟で引用します。

彼は当時広く取材活動をされており、北朝鮮金日成・韓国金大中・カンボジア「シァヌーク」殿下・スカルノ「インドネシア」大統領・ロスチャイルド・白洲治郎などと、知己の関連報道が多い新聞記者で、南京大虐殺が中國国民党の巧妙に仕組まれたデマで、あることにも言及している。

本題の講演内容は次のようなものです。

このシンポジュウムは、1952年の日本とインドの国交樹立60周年を、記念して開催されています。

このような歴史的瞬間を皆様と共にできることを光栄に存じます。

二十世紀で最も驚く展開は、五百年続いた植民地支配、その呪いが終焉を迎えたたことで、あります。

白人による支配が霧散してしまいました。

誰も予想しなかったことでした。

千九百三十年代末に「インドの独立はいつになるか」と問われネールは七十年後には実現するかもしれないと答えました。

つまり彼の亡き後というです。

しかし千九百四十年代初頭になると、インド人たちから、独立の機運が高まりました。

なぜ独立の機運が高まったのでしょうか。

答えは簡単です。

第二次大戦が勃発し、五百年のドラマの中の新興勢力が、日本でした。

インド独立のタイムテーブルは、ネールの七十年代から第二次世界大戦の終焉時へと短縮されたのです。

ここで二十世紀から十七世紀初めまで、時間を戻してみましょう。

インドでは、イギリスが(1600)年に東インド会社を設立し、植民地支配に着手しました。

イギリスは、マドラス (1937)ポンペイ (1661) カルカッタ (1690)に東インド会社を進出させました。

イギリスの侵略は、ブラッシーの戦い (1757) マイソール戦争 (1799) シーク戦争 (1845) と続き千八百五十七年から五十九年にかけて、反イギリス民族闘争である有名なセポイの反乱がおこりました。

こうしてイギリスがインドを仰圧する中で、日本で千八百六十八年に、明治維新がおこりました。

また、ほぼ同時期にマハトマ・ガンジが生まれ、千八百九十七年に、チャンドラ・ボースが誕生しています。

千八百七十七年、イギリスが直接インド全土を統治するインド帝国が成立し、ビクトリア女王が「 インド皇帝 」として即位しました。

つまりボースはイギリスのインド植民地に生を享けたのです。

ボースは今でも、インドで「　ネタージ 」と呼ばれています。

ネタージとは「 偉大な指導者 」という意味です。

日本の支援を得てボースは INAを設立しました (Indian National Army) インド国民軍です。

イギリスの地支配と非暴力主義で戦ったガンジーと対照的にボースは司令として戦闘を戦いました。

ボースは千九百四十三年五月十六日に来日し、島田海軍大臣・永野海軍軍令部総長・重光外務大臣と面会し、そのうえで、東条秀樹首相と会談しました。

ボースは日比谷公会堂で講演し、そのメッセージは当時のアジアの人々の気持ちを代弁していました。

「四十年前、小学校に通い始めたころに、アジア人の国が世界の巨人・白人帝国のロシアと戦いました。

このアジアの国はロシアを大敗させました。

そしてその国が、日本だったのです。

このニュースがインド全土に伝わると興奮の波がインド全土を覆いました。

インドのいたるところで、旅順攻撃や、奉天大会戦、日本海海戦の勇壮な話によって沸き立っていました。

インドの子供たちは、東郷元帥や乃木大将を素直に慕いました。

親たちが競って、元帥や大将の写真を手にいれようとしましたが、できませんでした。

その代わりに市場から日本製の品物を買ってきて、家に飾りました。

ボースは「 日本はアジアの希望の光だった } とハッキリと語りました。

ボースはこう続けました。

「 このたび日本はインドの仇敵のイギリスに宣戦布告をしました。

日本はインド人に、独立のための千載一遇の機会を下さいました。

われわれは自覚し、心から日本に感謝しています。

一度この機会を逃せば今後百年以上にわたり、このような機会は訪れることはないでしょう。

勝利はわれわれのものであり、インドが念願の独立を果たすと確信しています。

重要なのは、主張より行動でした。

ビクトリア女王が「 インド帝国 」皇帝に即位して六十六年目にあたる千九百四十三年十月、自由インド仮政府が設立されました。

シンガポールでの大会で、ボースは満場の拍手をもつて、仮政府首班に推挙されました。

ボースは「　チャロ・デリー 」 つまりデリーへと進撃を宣言し、人々はそのメッセージを掲げ行進しました。

祖国インドへ向けた歴史的な進撃の開始でした。

インド国民軍INAの将兵は日本軍と共に、インド・ビルマ国境を越え、インパールを目指し「 チヤロ・デリー 」雄叫びをあげ、進撃しました。

「 われらの国旗を、レッド・フオートに掲げよ 」とボーズは将兵を激励しました。

自由インド仮政府は、日本と共に、イギリス・アメリカに対して宣戦布告しました。

同年（ 千九百四十三年 ）十一月五日より六日間にわたって、東京で大東亜会議が開催されました。

これは人類の長い歴史において、有色人種によつて行われた最初のサミットとなりました。

東条首相・満州国の脹景恵国務総理・中国南京政権の汪兆銘行政院長・フィリッピンのラウレル大統領・ビルマのパー・モウ首相・タイのピブン首相代理のワイワイタヤコン殿下と、アジアの首脳が一堂に会し、ボースはインド代表を務めました。

今日、日本の多くの学者が大東亜会議は日本軍部が「 占領地の傀儡 } を集め、国内向けの宣伝のために行ったと唱えています。

しかし、そのようなことを言う日本人こそ日本を売る外国の傀儡というべきです。

会議では大東亜共同宣言が満場一致で採択されました。

ボースは日本は「 全世界の被仰圧民族のための憲章となることを願う 」と訴えました。

ボースは日本は「 全世界の有色民族の希望の光だ 」と宣言しました。

この五百年の世界史は、白人の欧米諸国が、有色人種の国を殖民地支配した壮大なドラマでした。

その中にあって、日本は前例のない国でした。

第一次世界大戦の後のパリ講和会議で、日本は人種差別撤廃を提案したのです。

会議では各国首脳が、国際連盟の創設を含めた、大戦後の国際体制づくりについて協議しました。

人種差別撤廃提案が提出されると、白豪主義のオーストラリアのヒューズ首相は、署名を拒否して帰国すると言って退室しました。

議長であるアメリカのウィルソン大統領は、本件は平静に取り扱うべき問題だと言って日本に提案の撤回を求めました。

山本権兵衛内閣で外務大臣を務めた日本代表団の牧野伸顕男爵はは、ウイルソン議長に従わず採決を求めたのです。

イギリス・アメリカ・ポーランド・ブラジル・ルーマニアなどが反対しましたが出席十六ケ国中十一ケ国が賛成し、圧倒的多数で可決されました。

しかしウイルソン大統領は{ 全会一致でない 」としてこの採決を無効としました。

牧野は多数決での採択を求めましたが、議長のウイルソン大統領は「 本件のごとき重大な案件は、従来から全会一致、少なくとも反対者なきによって議事を進める 」としました。

人種差別撤廃提案が十一対五の圧倒的多数で可決されたにもかかわらずウイルソン大統領はこの議決を葬りました。

今日の文明世界では、ありえないことです。

いまアメリカの大統領は黒人ですが、当時ではそのようなことは、全く考えられないことでした。

日本人も白人ではなく有色民族です。

同じ有色民族として誇りある日本民族は、白人の有色民族への暴虐を看過することができなかったのです。

インドネシアにも、触れておきましょう。

インドネシアの植民地支配は千五百九十六年にアランダが艦隊をインドネシアに派遣したことに始まります。

オランダの三百五十年以上に及ぶ植民地に終止符が打たれたのは千九百四十二年の日本軍の進攻によるものでした。

インドネシアには白馬に跨る英雄が率いる神兵がやってきて、インドネシアの独立を援けてくれるという伝説がありました。

日本軍の進攻は、伝説の神兵の到来を思わせました。

日本兵は、神話の軍隊であったのです。

ジョージ・カナヘルは「 日本軍政とインドネシア独立 」と著書で、日本の功績と次の四点を掲げています。

1) オランダ語の禁止 ・ 英語の禁止 これにより公用語としてインドネシア語が普及した。

2) インドネシア青年に軍事訓練を施した これにより青年が厳しい規律や忍耐・勇猛心を植え付けられた。

3) オランダ人を一掃し、インドネシア人に高い地位を与え、能力と責任感を身に着けさせた。

4) ジャワにプートラ (民族結集組織) やホーコウカイ (奉公会) の本部を置き、全国に支部を作り、組織運営の方法を教えた。

日本は第二次大戦でアジアの国々を侵略したとされますが、どうして侵略する国が、侵略された国の青年に軍事訓練を施すのでしょう。

彼らの精神力を鍛え、高い地位を与え、民族が結集する組織を全国につくり、近代組織の経営方法を教えることがあるでしょうか。

この事実は、侵略したのが日本でなかったことを証明しています。

日本はアジアの国々を独立させるあらゆる努力を惜しまなかった。

ではどこからの独立でしょうか。

もちろん、アジアの国々を侵略していた白人諸国の支配からの独立です。

ジャカルタの中心にムルデカ広場があります。

ムルデカはインドネシア語で、「 独立 」を意味します。

独立の英雄ハッタとスカルノの像とともに、高さ三十七メートルの独立

記念搭がたっています。

地下一階には、独立宣言の実物が納められています。

ハッタとスカルノがサインをしています。

一七・八は八月十七日の独立の日を示していますが「 〇五 」、〇五年とはどういう意味でしょうか。

インドネシア人はイスラム教徒ですが、これはイスラム暦ではありません。

ましてキリスト暦でもありません。

では〇五年とは何暦でしょう。

〇五年は日本の「 皇紀 」です。

千九百四十五年は日本の「 皇紀 」では二千六〇五にあたるのです。

初代の天皇である、神武天皇が即位とて建国した時から数えた年です。

ハッタとスカルノは日本に感謝して、皇紀を採用したのです。

インドネシア独立の生みの親は日本だったのです。

だから二人はインドネシア独立宣言の独立の日を日本の「天皇の暦に 」よって祝福したのでした。

皆さん、こうした西欧の五〇〇年に及ぶ植民地支配は世界中で認知されたことであります。

われわれは今日、植民地支配の禍の終焉をこうしてここに集い祝福してます。

日本は「 日の昇る国 」です。

真に自由なアジアの連帯を実現する重要な役割を日本が果たすことを願っています。

日がまた昇ることを願って、締め括らせていただきます。

English Page